様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４　年　５　月　３１　日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５２００６３
研究課題名（和文）　四世紀カッパドキア三教父による救貧の思想と実践

研究課題名（英文）　Thoughts and Practice of Philanthropy of the Cappadocian Fathers

研究代表者
土井　健司（DOI KENJI）
関西学院大学・神学部・教授
研究者番号：70242998

研究成果の概要（和文）：
本研究を通してカッパドキア三教父の救貧に関わる思想と実践について総合的に明らかにすることができた。大バシレイオスは３６９年の食糧危機に際して富裕者に食糧の供出を求めて実現し、さらに７２年には世界最古の病院の一つ「バシレイアス」を建て、主にレプラの病貧者のケアを実践する。ナジアンゾスのグレゴリオスはこれをサポートする説教を行い、ニュッサのグレゴリオスも同様の説教ならびに他の救貧説教を残している。彼らの思想では、貧者はキリストであり、貧者へのケアはキリストへの奉仕になる。これを支えるのが受肉論である。逆に言えば、受肉論によってはじめて、社会のなかで人間扱いされない貧者（特にレプラの病貧者）が「人間」としてクローズアップされるのである。

研究成果の概要（英文）：
In these studies I have examined the Cappadocian`s thought and practice of philanthropy. In the famine of 369 Basil the great has made a sermon stating that the rich should open their storehouse. In 372 he has made Basileias, the one of the oldest hospital in the history of the hospital in which the poor (most of them are the leprous men) have benn attended. Gregory of Nazianz and Gregory of Nyssa have made sermons to support Basileias. Gregory of Nyssa has also made the other sermons to support the poor. In their thought the poor are Christ. To attend the poor is to serve Christ. This is supported through the theory of the incarnation. By the incarnation the poor who are not usually regarded as the human are noticed that they are human beings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・宗教学
キーワード：カッパドキア教父　バシレイオス　ナジアンゾスのグレゴリオス　ニュッサのグレゴリオス　救貧　フィランスロピア　飢饉　レプラ

１．研究開始当初の背景

この科研費の研究をはじめる以前、ニュッサのグレゴリオスの救貧研究を通して下記の課題を意識するに至った。

（ａ）ニュッサのグレゴリオスは、単独ではなく、カッパドキアという地域の中で救貧の実践を行い、思索した。それゆえニュッサのグレゴリオスだけではなく、大バシレイオスやナジアンゾスのグレゴリオスにおける救貧の思想の研究を行い、グレゴリオスを含めて全体的に捉える必要がある。とくにバシレイオスの建てた救貧施設、通称「バシレイアス」の思想的意味は何か、その基盤にはどのような神学思想があるのか。たとえば ギリシアのポリスとの関連性をもとに新しい人間愛による神的都市の実現という興味深い説を示唆する研究者もいた。またこの「バシレイアス」とナジアンゾスのグレゴリオスの救貧思想やニュッサのグレゴリオスの思想との関係はどのようなものであり、それが両者にどのような影響を与えているのか。また救貧思想においてそれぞれの人間論、終末論、救済論はどのように展開するのか。こうしたさまざまな問題を含め、その全体像を研究してみなければならない。

（ｂ）従来の研究は救貧の問題を社会史的視点から探求してきているが、神学思想としてはまだ十分には研究を行っておらず、カッパドキア教父における救貧の思想というものを全体的に考察し、把握する必要がある。

(c) フィランスロピア論については、４世紀の異教の哲学者テミスティオスとユリアヌス帝のフィランスロピア論を研究し、その対比においてカッパドキア教父のキリスト教的フィランスロピア論、救貧の思想を考察する必要がある。救貧の問題は行政の問題でもあり、伝統的なギリシア・ローマの宗教の復興を目指したユリアヌス帝のフィランスロピア論はテミスティオスの影響の下にあると言われる。両者との比較を通してカッパドキア三教父のフィランスロピア論、救貧の思想の特徴が明らかになるものと思われる。

以上が本研究の背景にある課題であった。

２．研究の目的

これらの課題をもとに４年の研究期間においてカッパドキア三教父の救貧思想を総合的に明らかにすることを目的とした。

カッパドキア教父というと、教理史においては三位一体論などの教理を確立した思想家として取り上げられ、またニュッサのグレゴリオスのように神秘思想家として言及される場合もあり、さらにそれらとは別に、社会史的な視点からは行政問題を担う「司教」として論じられることが見出せる。本研究の目的は、キリスト教独特の思想問題として救貧を考察しようとするものであり、救貧という具体的な実践活動との関連でその思想を考察し、そこに見られる受肉論、フィランスロピア論、終末論などの神学思想を考察することが本研究の目的であった。

３．研究の方法

研究目的を達成するために本研究では、平成２０年度から２３年度までに救貧問題にかかわるカッパドキア三教父の講話を中心にこれらを順次取り上げ、考察を加えていった。なおニュッサのグレゴリオスについての考察は、これまでの研究によって一定の蓄積があるので、大バシレイオスとナジアンゾスのグレゴリオスの講話が主たる対象となる。詳細は次項「研究成果」を参照のこと。

４．研究成果

【平成２０年度】

初年度は、大バシレイオスの救貧の思想と実践について研究を遂行した。彼の「飢饉と旱魃の時期に」ならびに「『私はわが倉を壊した』について」の読解を行った。またナジアンゾスのグレゴリオスの『バシレイオス頌』６３章などを基に救貧施設「バシレイアス」の研究も行った。「バシレイアス」については、日本宗教学会の学術大会でも発表したように（古代キリスト教と人間愛（フィランスロピア）――四世紀カッパドキア教父の救貧思想への序)、一定の成果を得

られた。そこで世話を受けていた病者が当時「レプラ」と呼ばれていた病者であったこと、その救貧思想の根本にはフィランスロピア論（＝フィロプトキア論）とキリスト論（人間として貧者に出会う根拠場所として）とがある。その成果の一部は、論文「フィランスロピアとキリスト教批判の諸相」においても発表した。

またテミスティオスとユリアヌス帝のフィランスロピア論については、その背景としてカイサアリアのエウセビオスのフィランスロピア論を理解しておく必要から、まずはエウセビオスの『教会史』におけるフィランスロピアの用法について研究し、論文にまとめた（「エスセビオス『教会史』におけるフィランスロピアの用法」）。神と統治者のフィランスロピアについて、ならびに死者に対するフィランスロピアなどについて知見を得た。

本研究に先立つ前年度の研究を軸にして、論文「ニュッサのグレゴリオスにおける救貧と否定神学」をまとめた。この論文では、救貧の実践における思想の可能性を問題とした。グレゴリオスはレプラと思われる病気の貧者についてその病名を一切語らない。この「語らない」という否定の意味を考察し、救貧の実践と否定神学の関連性の可能性を追求した。

【平成２１年度】

まず大バシレイオスの詩編第14編第二講話を取り上げて、その読解を行った。この講話は高利貸しを反駁し、安易に借財をつくる者どもを戒める内容になっている。弟のニュッサのグレゴリオスの同様の講話が高利貸しのために窮乏する農夫を対象とし、むしろ高利貸しに絞った批判を展開するのに対して、バシレイオスは借財をつくる者への戒めを含む点で異なる。ただしこの講話の最後では、フィランスロピアの視点からの議論が展開しており、フィランスロピアとミサンスロピアの対比で議論が展開するあたりは、グレゴリオスと同様である。むしろグレゴリオスがこれを取り上げて徹底したと言えるであろう。

なおこの講話と平成２０年に研究した「旱魃と飢饉のときに語られた講話」「『私はわが倉を壊した』についての講話」をあわせて「バシレイオスの救貧思想」の題で研究発表を行う予定であったが、口頭発表の段階では（キリスト教史学会学術大会）、十分な比較検討ができず、「旱魃と飢饉のときに語られた講話」のみに絞ったものとなった。しかしこの発表は編集委員会から学会誌に寄稿するよう求められたため、三つの講話を合わせて考察した論文を執筆し、寄稿した（論文「どうすれば貧者の苦があなたには見えるのか――飢饉におけるカイサレアのバシレイオスの救貧思想」）。

また「旱魃と飢饉のときに語られた講話」についてはその翻訳を作成し、『神学研究』において発表した。

さらに先年研究したバシレイオスによる救護施設「バシレイアス」については、フィランスロピア論の視点を含め、現代的問題を射程に入れて論文「忘却されし者へ眼差しを――バイオエシックス・人間愛・キリスト教」を執筆した。

【平成２２年度】

ナジアンゾスのグレゴリオスについて、主に第十四講話を研究対象とし、そこで語られる救貧思想を明らかにした。３７２年頃になされたこの講話では、おそらくはバシレイオスの病院建設を支援する目的で主にレプラの病貧者の救済が訴えられる。グレゴリオスはその社会的抑圧の様子を実に詳細に語るなどとても力を込めて語る。

研究の結果、その救貧思想についてフィランスロピア概念をもとにいわば縦軸と横軸の交差するところで成立していることを明らかにした。この講話は思想書ではなく、まさに講話としてグレゴリオスは様々に言葉を尽くして救貧を訴える。そのため断片的な思想も多々混ぜられており、そうした多様性が魅力でもあろう。それでも彼の救貧思想は根本に一つの思想が横たわっている。それを明らかにしてくれるのが、彼のフィランスロピア概念である。この概念を検討した結果、縦横二つの軸の交差として捉えることで解明できることを見出した。横軸とは、レプラの病貧者であっても同じ人間として平等であるという関係を指す。ここでグレゴリオスはこの病貧

者の姿を描くことで同じ人間として聴く者の感情を掻き立ててもいる。また縦軸とは、受肉と神化（テオーシス）の双方向を意味する神と人間の関係である。神が人間になることでわれわれも神に成る可能性がひらかれる。その現実化が救貧の実践なのである。その際キリスト＝病貧者という等式（この場合は神に向かうこと）と、救貧によって援助者＝キリスト（神に成ること）という等式の二つが重なってくる。神に向かい、神に成ることである。こうして受肉と神化という縦軸、同じ人間同士という横軸の交差するところでグレゴリオスの救貧思想は成立している。

なお成果は日本宗教学会第69回学術大会（東洋大学）において発表し、その後これを論文化し、『関西学院大学キリスト教と文化研究』に投稿し公刊した。

【平成２３年度】

最終年度であるためこれまでの研究において積み残した課題を研究すべく実施した。当初三つの課題を掲げたが、第一のバシレイオスのフィランスロピア概念の全用例の研究は最後まで至ることが出来なかった。また第三の課題であったユリアヌス帝のフィランスロピア論は、検討した結果、先行研究で十分と判断した。第二の課題としてバシレイオスの設立した病院施設「バシレイアス」については論文「カイサレアのバシレイオスと「バシレイアス」」にまとめた。以下「バシレイアス」について論文より抜粋しておく。

バシレイアスは「３７２年から３７３年の間に、ウァレンス帝から賜ったカイサレア近郊の土地に建てたものであって、数棟の施設から成り立っていた。そのなかには修道施設、礼拝堂も含まれており、さらに生きるための技術、たとえば調理のための建物などもあり、看護者、医者、牛馬、さらに案内人として聖職者たちもいた。こうしてナジアンゾスのグレゴリオスはこの施設群を「新しい町」と呼ぶ。この施設は立派なものであり、バシレイオス自身によって「カタゴギア」「クセノドケイオン」と呼ばれ、また「プトコトロフェイオン」とも呼ばれている。バシレイオスは富裕層の寄付によってこの施設を運営し、そのため、おそらく患者や旅人などは無料であったのであろう。また彼は定期的にこの施設を訪れていた。そこでは旅人、異邦人などの貧者が世話を受けていたが、とりわけレプラの病貧者が手当てを受けており、バシレイオス自身が率先してその治療に当たった。その看護、世話、治療などは修道士たちによっても実践され、それはバシレイオスの修道的生活のプログラムに含まれていた。」

なお研究全体をまとめるための素描は、論文「なぜ神は人となったのか―古代キリスト教における受肉論の射程」や同名題の招待講演において発表した。そこではとくに次の二つのテーゼを示した。

①受肉論においてフィランスロピア論が軸となっていること。神（キリスト）＝貧者＝人間という等式、あるいは受肉論が社会的、実践的次元では救貧と結びつくこと

②受肉によって、人間とは見なされない貧者が「人間」としてクローズアップされる。人間性というものの発見が受肉論によって可能にされている。

本研究の研究成果は以上となる。

５．主な発表論文

〔雑誌論文〕（計８件）

①土井健司、カイサレアのバシレイオスと「バシレイアス」、『宗教研究』、査読あり、372 号、2012 年、1-26 頁.

②土井健司、神はなぜ人間になったのか―古代キリスト教思想における受肉論の射程、『理想』、査読無し、688 号、2012 年、53-63 頁.

③土井健司、ナジアンゾスのグレゴリオスと貧思想、『関西学院大学キリスト教と文化研究』、査読無し、12 号、2011 年、39－58 頁.

④土井健司、どうすれば貧者の苦があなたには見えるのか――飢饉におけるカイサレアのバシレイオスの救貧思想、『キリスト教史学』、査読あり、第 64 集、2010 年、148－171 頁.

⑤土井健司、バシレイオス：飢饉と旱魃のときに語られた説教、『神学研究』、査読無し、第 57 号、2010 年、67－81 頁.

⑥土井健司、ニュッサのグレゴリオスにおける救貧と否定神学、『パトリスティカ』、査

読無し、第 12 号、2008 年、37－54 頁.
⑦土井健司、フィランスロピアとキリスト教批判の諸相、『宗教研究』、査読あり、第 357 巻、2008 年、205-225 頁.
⑧土井健司、「エウセビオス『教会史』におけるフィランスロピアの用法」、『神学研究』、査読無し、第 56 号、2009 年、69-78 頁、

〔学会発表〕（計５件）
①土井健司、神はなぜ人間になったのか一古代キリスト教における受肉論の射程、2012 年度キリスト教史学会西日本部会、2012 年 3 月 3 日（大阪；関西学院大学梅田キャンパス）
②土井健司、キリスト教における生命至上主義とＱＯＬの概念、日本生命倫理学会第 22 回年次大会、2010 年 11 月 20 日（名古屋；藤田保健衛生大学）.
③土井健司、ナジアンゾスのグレゴリオスにおける救貧思想――第十四講話を中心に、日本宗教学会第 69 回学術大会、2010 年 9 月 5 日（東京；東洋大学）.
④土井健司、カイサリアのバシレイオスの救貧思想、キリスト教史学会学術大会、2009 年 11 月 22 日（東京：国際基督教大学）
⑤土井健司、古代キリスト教と人間愛（フィランスロピア）――四世紀カッパドキ教父の救貧思想への序、日本宗教学会第 67 回学術大会、2008 年 9 月 15 日（筑波：筑波大学）

〔図書〕（計 2 件）
①向井考史編『人間の尊厳と深淵』、関西学院大学出版会、2010 年、49－65 頁（第３章、社会の深淵に沈む「人間」への眼差し――カイサリアのバシレイオスとニュッサのグレゴリオスの救貧思想）.
②小松美彦・香川知晶編『メタバイオエシックスの構築へ』、ＮＴＴ出版、2010 年 3 月、185－205 頁（忘却されし者へ眼差しを――バイオエシックス・人間愛・キリスト教）.

６．研究組織
(1)研究代表者
土井　健司（DOI KENJI）
関西学院大学・神学部・教授
研究者番号：７０２４２９９８